

4 ブロイラー農場で発生した壊疽性皮膚炎の一例

宮崎県都城家畜保健衛生所 ○吉田^{よしだ} 恵理苗^{えりな} 阿南^{あなん}
ひなもり家畜診療所 華奈子^{かなこ}
渡邊^{わたなべ} 拓一郎^{たくいちろう}

1 はじめに

壊疽性皮膚炎は、*Clostridium septicum* や *C. perfringens* 等の感染により、皮膚病変を伴って急死する疾病である。今回、管内のブロイラー農場で皮膚炎を伴い死亡鶏が増加する事例が発生したので、その概要を報告する。

2 発生概要

当該農場は、開放、平飼い4鶏舎、計52,000羽を飼養し、その内の1鶏舎において、28日齢から皮膚炎を伴う死廃の増加がみられ、39日齢でピークを迎え(1.3%)、49日齢で終息した。死廃率が増加した29~31日齢にアンピシリンを飲水投与したが改善されず、35日齢から同薬の2.5倍量を、39日齢からアモキシシリンの投与を行った。

3 材料および方法

病性鑑定は35日齢の死亡鶏5羽について実施し、脳、主要臓器、皮膚、筋肉を検査材料とした。細菌学的検査は、各材料のスタンプ標本の直接鏡検、菌分離、分離菌の同定および薬剤感受性試験を行った。PCR検査は、*C. perfringens* の毒素型別(A/C型)、筋肉材料より抽出したDNAから、*C. septicum* および *C. chauvoei* 特異遺伝子の検出を行った。病理組織学的検査は、常法に基づいた。

4 検査結果

剖検では、5羽全てに腹部全面の皮膚のただれ、皮下にガス貯留、胸部皮下に赤色滲出物、肝臓の退色が認められた。直接鏡検では、浅胸筋において全羽でグラム陽性球菌、内2羽で芽胞形成グラム陽性桿菌がみられ、浅胸筋から *C. perfringens* が分離された。分離菌の薬剤感受性試験では、ペニシリン系に耐性が確認された。筋肉材料のPCR検査では、2検体で *C. septicum* 特異遺伝子が検出されたが、菌分離は陰性であった。病理組織学的検査では、4検体で浅胸筋において筋線維の硝子化、崩壊、壊死がみられ、筋線維間に多数の大桿菌が認められ、2検体で胸部皮膚の真皮から皮下織にかけて大桿菌が多数観察された。

5 考察とまとめ

病性鑑定の結果、本症例は壊疽性皮膚炎と診断された。原因菌には *C. perfringens* とPCR検査で検出された *C. septicum* の関与が示唆された。再発防止対策として、オールアウトした農場での鶏舎環境の衛生対策を重点的に行った。水洗回数を2回から3回に増やし、有効薬剤を高濃度使用した消毒を行う

と共に長靴の履き替え等衛生管理を徹底したところ、次ロットでの発生は認められなかった。伝染性疾病の被害を最小限に抑えるためには、「発生の予防・早期発見・迅速な対応」が重要であり、また、日頃から適切に飼養衛生管理を遵守していくことが、疾病の発生予防に重要と考えられた。